
俺と彼女と夢物語

もみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女と夢物語

【ZPDF】

Z0499W

【作者名】

もみじ

【あらすじ】

恋愛小説を書いてみよっかな・・・と思いつチャレンジ

特殊な主人公がその”特殊”を隠しながら育んでく恋物語です
過度な期待はしないで見てやってください

それと不定期更新です

せめて二日に一回更新できればいいかな

都会へ行けりう（前書き）

D・C・の ま う な 感 じ の 作 品 を か け れ ば な あ ・ ・ と 想 つ て 出 し た
こ の 能 力 ・ ・

都会へ行こう

俺には幼いころから人とは違う能力があった
いつごろからこの能力があつたのかは忘れた
でもたぶんあのころだろう・・・

幼馴染の引越し、自動車の事故、両親の死・・・

あの一気に色々なモノを失ったとき

俺はこの能力に会えたのかかもしれない

この能力は俺を助けてくれたけど

俺から大切なものを奪つていった

俺の能力・・・それは

「人の心が読める」

能力に気づいたときは些細なものだつたと思つ

おぼろげな記憶を読み返してみれば

たしか両親が事故で死に、俺が落ち込んでいた時に飼っていた猫が
しゃべつたと錯覚したのが始まりだつたと思つ

しかし、それは俺から人を遠ざける始まりでもあった

子供は無知で残酷だ

自分に理解できないものは全て淘汰する

まあ、ありがちな話だよ

俺の猫はしゃべるといつと みんなは「嘘だ」とはしゃきたて

俺には聞こえるのに みんなには聞こえないと分かると 「化け物」
とはしゃきたてる

そしてみんなは離れていき

俺はふさぎ込む

そして人が信じられなくなつて 俺のそばにいてくれた友達も「同
情だ」と言つて疎遠にして

さらに能力が強化されていく

そこから俺の地獄は始まった

聞きたくもない人の心の闇が俺に流れ込んでくる

閉じこもっても木の声が聞こえたり 鳥の声が聞こえたり
酷い時には家の前を通る人の心の声まで流れてくる
親戚には「精神病」とか「不気味な子」などと言われ たらいまわ
しにされ

最終的には親の遺産を持つて 孤児院へ

さすがの親戚も金のために不気味な子を飼いたくはなかつたんだろ
うよ

そして孤児院に入つても俺は浮いたまま

俺は人と触れ合つのが怖くて 一人になり

孤児院仲間は俺が嘘つきだと離し立て

孤児院の教員は俺に近づこうともしない

俺の心はもう壊れてもおかしくはなかつた

いや、もう壊れていたのだろう

だけど・・・

だけど神父さんだけは違った

あの人は俺の話を真意に聞いてくれて

しかも相談に乗ってくれた

神父さんは心の中も同じことを言っていたから本当に救われたよ

そして神父さんは俺の心を鍛えてくれた

周りから奇異の視線に耐えられるようになった

俺が周りの声を聴いても壊れないようになれた

そうして俺は孤児院のみんなに虐げられ、神父さんに助けられて育つて行つた

そして今日

15歳になった俺は孤児院を卒業して都会で一人暮らしをする

小さいころから神父さんにお願い込んでバイトなどさせてもらっていたし、親の遺産もある

ツテも一応ある……向いでの仕事も一応ある

能力も神父さんと一緒にがんばってコントロールできたりになった

「……電車が駅についたよ」

俺は今までの思い出を胸にしまい、初めての都会に胸を踊らせながら改札口を出る

まさに絶好日とも言えるほどの中晴に俺は田を奪われながらつぶやく

「来たか……美坂町」

都会へ行こう（後書き）

心を読めるってヒロインには多いけど主人公には少ないよね

まあ、恋愛としてすぐ終わっちゃうからだらうけど・・・

でもあえてそれにチャレンジしてみます

本庄 彰
年齢：15歳

容姿：右田の下にほくろがある

茶色が混ざった黒色の短髪

平均よりも背は低め

女顔

性格：

心が鍛えられてるので 少しの事には動じなくなってる

基本ツツコミキャラ？

深く考えると それにのめり込んで周りが見えなくなるときがある
女顔に泣きぼくろ、さらに守つてあげたくなるオーラがどこからか
出でるので（この文は彰により、削除されました。御了承ください。）

心を鍛えた今も人と触れ合つのに臆病ではあるけど
人と触れ合いたくないと思つてるわけではない

お金持つひやないつかー（前書き）

そうこや いれ

設定とかプロジェクトとか何も考えてないんだよね

とりあえず不定期更新でグダグダと書きますけど・・・

お金持ひじやないつすか！

絵に描いたような快晴を田にした俺は 大きく息を吸つ

「うう・・・ケホッケホッ・・・う、うー・・・吸い過ぎた・・・

ふう・・・それにしても都会の空氣はまことによく言つたど あんまりわからないな

「ここに慣れてから 故郷に戻れば わかるかな？

故郷は自然が取り柄みみたいなものだつたし・・・

「おい、邪魔だぞーー」

「わッ、とヒッ・・・すみませーん」

いつまでも駅の入り口にいるもんじゃないな 怒られちやつた

といつあえず愛想笑いしながら 謝るナビ・・・

うん、神父さん・・・わかつてゐよ 「笑顔は物事を円滑にする」・
・・だよね！

とつあえず由紀弥さんのここに行かなくひや・・・

俺が都会に来た理由・・・それは色々あるけど 一番の理由は由紀

弥さんだ

由紀弥さんは今の俺の保護者でもある人だ

母さんの親友らしいけど・・・年は不明

由紀弥さんは性格的には難がある人だけど 心はとても清らかな人だ
当時の俺は人から離れてたから 由紀弥さんを邪険にしていたんけど

その時から 由紀弥さんは俺の保護者になるつもりだつたらしい
俺が孤児院に入つてふたヶ込んでもともとくちゅく様子を見に
来てたらしいんだ

俺が神父さんに心を鍛えてもらつてると同時に由紀弥さんと初めて会
つて・・・

由紀弥さんは俺の事を知つたら みんなと同じようにそういう顔で
みるんだろうな・・・

そう思つていた

だけど由紀弥さんは黙つて俺を抱きしめてくれて・・・俺を孤児院
から引き取ることにしたんだ

でも、その時の俺はまだ小さいし 心が弱かったから 中学校を出
たら・・・ということで引き取られるのは延期になった

でも由紀弥さんは時々孤児院までやつてきては 俺と一緒にいてく

れて・・・

神父さんがいたから俺は救われて、由紀弥さんがいたから俺は立ち上がることができたんだと思う

そして中学校を卒業した俺は戸籍上では由紀弥さんの姓である本庄をもらつて本庄 彰となつている

旧姓は三村だ まあ、今となつては 完全に吹つ切れたから 旧姓に愛着があるわけでもないが・・・

少しさみしく感じてるのかも知れない

そして俺こと本庄彰は由紀弥さんに頼まれて仕事の手伝いをすることになり、その仕事場がある美坂町まで行くことになつたわけだ
始めは由紀弥さんの家と一緒に住むことになつていていたのが「さすがに15で同棲はまずい」と告げると真っ赤になつて怒つていた
でも心の声聞いたんだよね・・・（女扱いしてくれてるんだ）
つて・・・

それを聞いたもんだから ますます意識しちゃつて 俺は一人暮らしすることにした

まあ、一人暮らしと言つても由紀弥さんの家の隣なんだけれどね

由紀弥さんは以外にお金持ぢらじくて ここ一帯の土地を持つているらしい

それで由紀弥さんの家の隣に住むことになった

・・・や俺つて由紀弥さんのこと全然知らないな

仕事も、年も・・・一応住所は教えてもらつたから知つてゐるけど
どんな家なのかも知らない

もしかしたら結婚してるかもしれないし 子供もいるかもしれない
けど 心の声を聴いてる限りでは それはないだろつ

あ、だからこそ 年のことは禁句なのかな

前、由紀弥さんに年を聞いたら ヘッドロックかけられて そのま
ま意識を失つたことがあつたな

たしか心の声を聴いて 年を知つたはずなんだけど・・・ヘッドロ
ックの衝撃で忘れてるみたいだ

つと・・・考え方したら 着いたな

「へえ～・・・これが由紀弥さんのことえつー」

「な、なんじゃーつやあーでかいーすつー」でかいー

「えつ・・・ネームプレートネームプレート・・・・・本庄つて
書いてある・・・」

はあ・・・由紀弥さんは昔から謎の多い人だとは思つてゐたけど
謎すぎるよ・・・

「ひとつあります……インターほん……」

ピンポーンと「うお決まりな音がなり、由紀弥さんが出る

「はーい……あ、彰君ね ちょっと待つてー 今開けるわ~」

「うひ~うひ~と回転アビでかい門が開く

「ほくえー……ひて!なんなんですか!遠隔操作できる門とか漫
画の世界かと思つてしまつたよー。」

「うそ~あ~……都會だからよ」

「都會だ」というなんですか!都會怖いですねー。」

「やつやつ 怖いのよ~都會は 彰君なんてペロコと食べられちゃ
うわよ?」

「はあ……まったくこの人は……」

話が通じないんだもの……その言葉は車の音にかき消された

「えつ……ええ!~な、なんで家に車!~ってか広つ!庭ひろつ
! 庭だけで野球できるんじやないですか!」

由紀弥さん……何者……?

その庭を走つてきた車から由紀弥さんが出てきた

「野球できるかもだけど 野球は駄目よ 庭師が怒るわ」

「いや……せつませるよ……って庭師！？庭師って言いました
！」

「あーもう……」んなとひひでしゃべってないで中入ります
春と言つてもまだ寒い」

「あ、そうですね 詳しい事は中で聞きます

はあー……都會怖いなあ……
俺、やつてこけるかなあ？

お金持ぢぢやないつすか！（後書き）

とまあ・・・彰君に都会のイメージを誤解させてみました

よし、これからは出てきたキャラの説明をあとがきに書いていこう
つてことで1話には彰君の説明書いておこう

本庄 由紀弥

年齢：不明

容姿：なぜか彰が幼い時に会った時から姿が変わっていない
青い長髪のストレート

長身

胸はぐくらぐ

性格

天然が少し入つてゐるけど 基本的にサバサバしたいい人
身内が困つてると どうしても助けてあげたくなる
金を持つてゐるという自覚はあつても金持ちという自覚はない
人情にもろかつたりする

都会つて・・・都会つて・・・（前書き）

今回のタイトル書いたときに「都会つて・・・とか言つて・・・と変換されちゃって 笑いまくって しばらぐ再起不能でした

都会つて・・・都会つて・・・

あの後由紀弥さんの家に入った俺は家の中でかさを改めて実感したことのでかさなら執事とかメイドとかいるんじゃないか！？とひょつと期待してたけど

「他人が家にいるのとかリラックスできないのよねー」と言つていた以前、俺と一緒に住もうとしてたところから 俺を家族として見てくれるんだな・・・とわかつたんだけど

それに気づいたら少し涙が出てきて 由紀弥さんにバレるのは恥ずかしいから慌ててぬぐつたり・・・

その後、応接室まで案内してもらつて そのまま由紀弥さんに色々美坂町について詳しく教えてもらつた
駅のパンフレットに書いてあつたりしたから それで少しは知つていたけど
やっぱり住んでる人に聞くと色々な小話とかも聞ける

「怪奇！携帯電話のストラップに携帯電話を付ける少女」とか「美坂町百八不思議」とか

正直これを聞いたときはツツツ「ミ」しか出なかつた
しかも由紀弥さんは不思議にも思つてないし・・・
「それくらいで驚いてちゃ都会で行けていけないわよ？」とか言わ
れたら「そうなんですか・・・」としか言えないし・・・
都會つてなんなんだろ？・・・
あ、そつやつそのツツツ「ミ」の時なんだけど

「なんすかソレ！携帯電話はストラップじゃないといつかなんとい
うか・・・ああもうおかしすぎてツツツ「ミ」めない！」

「違うわよ 彰君 携帯電話はソックロおものじやないわ

とかいう由紀弥さんの意味不明な言葉とか

「108-1-108つて多ツ！普通フ不思議じやないんですか！？」

「私の不思議は百ハ式まだあるわ

などといつ電波な発言までもうつて・・・

正直都会は俺には早いんじやないかと不安になつた・・・

でも神父さんに「いづれ彰には困難がぶつかってくんだろつ しか
しそれから逃げてはいけない」

そう教えてもらつていたので 俺は頑張ることに決めた

美坂町のことを見たあとは由紀弥さんの仕事のこととか 俺の家
のこととか聞いた

由紀弥さんの仕事は諜報系とだけ教えてもらつた

意味わからん・・・ 初め聞いたときなんか「長方形ー？えつ長方形
つて・・・えつ？ええつ！？」などといつお決まり？なこと言つち
やつたし・・・

いやでもさ・・・「私の仕事？諜報系よ」なんて言われたら10人
中8人は「長方形」つて聞き間違えるんじやないだろつか・・・
まず諜報系つてなにわ・・・

いやまあ、それでも諜報系つてのは納得できると思つ

由紀弥さんが俺みたいなあまり取り柄のない少年に仕事を手伝つて
ほしいというなんて 俺の能力が便利だからだろう
諜報というのが何を目的にしてるのかはわからないけど 人の心以
外にも 木々や建物などの声も聽ける俺は便利だろう

正直 俺はこの能力がそんなに好きじゃないけど 役に立つという
のなら俺は惜しまずこの能力を使う

それに最近はコントロールがかなりうまくなつてたから 条件を付
けて 心の声を聞いたり 指向性をつけて 聞いたり などのこと
もできるから 負担なんてものもない

由紀弥さんはどこか俺にその仕事で頼み」とがあるのだろう
それでその頼みごとには俺の能力が関わってる・・・
つまり何かの心が知りたいのだろう

俺の能力は便利だ

例えば 人質を拷問することなく知りたいことを聞けたり
そこらへんの心の声を聞けば 人に会わずに潜入することもできる
だろう
それに 金庫の声を聞けばパスワードもわかる

・・・スパイになれるんじゃない?俺

まあ、それでも不便なところはあるけどな

いつぺんにたくさんの声を聞くと頭が痛くなるとか

相手の声を一方的に聞くだけなので 動物などじゅべれるといふ

わけではないといふこととか

まあ、故郷には人間の言葉を理解できるほど頭の良い犬がいて あ

いつとは喋れたけど・・・

あいつ元気にしてるかな・・・

ん・・・話が過ぎたな で、俺が何が言いたいのかと言つと

「いーへら俺の力が便利でもその理屈はおかしいです由紀弥さん!」

「えー・・・でも、可愛いでしょ？」の子

「あ、はい・・・まあそれはわかりますけど・・・いや！だったら
なおさらダメでしょ！由紀弥さんにも言いましたけど 同棲なんて
！」

そう俺は困つてゐるのだ

由紀弥さんに仕事を聞いたあとに 由紀弥さんが何か閃いた
よつた顔になつて

俺が「あ、やべえ」と思った時にはもう 田の前に女の子が連れられてきていて

「この女の子 矢代真雪つて言つんだけど なんか無口なのよね
つてことでよろしくー」

などという訳のわからない理屈で俺に丸投げされたんだ

「いいじゃない 彩君は無口な女の子を毒牙にかけるよつたな鬼畜眼鏡じゃないんでしょう？」

「鬼畜でもないし眼鏡でもないんですけど 間違いとか起つたらどうするんですか！」

「役得でいいじゃない」

あ・・・駄目だこの人・・・マジでそう考えてやがる・・・
たぶん何言つても無駄なんだろうな・・・
はあ・・・俺の生活はどうなつていくんだらうな・・・
なんでこんなことになつたんだろうな・・・

「都會だからよつー」

「地の文を読むなー」

メタいことだけはやめてほしいよ まったく・・・

都会つて・・・都会つて・・・（後書き）

とつあえずどんどん人を追加させていかないとなー・・・

矢代 真雪

年齢：15

容姿：いつも眠そうな顔

緑色の長髪

上の方で結んだポニー テール

胸はB

口リ体系

非力

性格：彰君が心を覗くのに嫌悪感を感じない
無口

でもそれはしゃべらないんじゃなくて その表現のしかたを知らないだけ

割と興味心が旺盛で彰君の家ではしゃがまわったり 探検気分で屋根裏部屋に入つたりする

「、同棲開始……あ、でもその前に……（前書き）

あ、そういうことを言つてしませんでしたが

タイトルは彰君ですね

例えば今回だと

彰「う、う、同棲開始……あ、でもその前に……」

となります

まあ、気づいている人多そうですが 一応言つておきました

ふ、同棲開始……あ、でもその前に……

「えっと……部屋とか……どうある?」

俺は今非常に困ります
あの後、由紀弥さんに強引に押し切られて 真雪つて子を引き取る
感じになつたのだが……

「…………」

この子……しゃべらないんですね……
心を覗けば早いんだけど もし「うわー……」にいやべー、マジやべー、
ジやべーよ 何こいつ? もう「主人様気分つてやつへマジキモー」
などと思つてゐるのなら 俺の精神は崩壊する
こんな可愛い子にそんなこと思われてたら……ゾクゾク……いや、
なんでもない

とりあえずそんなイメージがさつきから降つて湧いてくるので心を
覗くか覗かないかで迷つてゐる……
由紀弥さんは多分 この子が無口だから俺に渡してきたんだりつ
うまく対処してくれると思つて……

でも俺には無理です! ミュ障つてわけじゃないけど 俺は人と触
れ合つのが苦手だったんだ!

今だつて「厚かましいとか思つてないよね……?」とか考えちや
つてドキドキしながら真雪ちゃんの荷物整理してゐるんだ……

あう……真雪ちゃんの視線を感じる……ああ……どうしよう
どうしよう……

と、ヒリあえやー！

「お、お風呂……沸いてるから は、入つたら？」「

なんか風呂覗きたい入つぽい事につけやつたーーあーやはこやはこ
やばーー。
ど、どんどうしきつー。

「…………うる」

お風呂入るつてさー！

うんーもう頭混乱しちゃつて……どつしたらこいのー？
神父さん！俺に教えてくださいー！

「あ…………着替え…………」

「あつ…………そつ、そつだつたね き、着替えね 由紀弥さんが言
うにはこのダンボールに着替えが…………ひやわあつー？」

慌てながらも俺はダンボールを開けると そこには下着が……
いわゆるパンティーとブラジャーと呼ばれるものが……
男の子の夢の塊が……

「下着…………気にならぬの？」

「えつ、あつ つや、やつじやなくて……あ、そのつ、これ……
どつわつー。」

謝れ やつきの俺……今の俺は完璧に「ノリコ障だ……

とりあえず真雪ちゃんは 下着持つてお風呂行つたから これ以上の醜態は見せずに済んだけど・・・
どうしよう・・・？下着持つちゃつたし・・・変な人つて思われてないかな・・・？

あ、そういうや下着持つて・・・右手・・・
ちょっと嗅いでみようかな・・・どんな匂いが・・・

つてダメダメダメダメ！

何考えてんだ 僕のバカ！

今まで女の子とそんなに触れ合つたことがなかつたからつてー
さすがにそれはないだろう！
完全な変態に成り下がるぞ僕！
相手がいくら可愛いからつて駄目だぞ僕！
気をしつかりもて僕！

ふう・・・神父さん・・・僕・・・心強くしたはずだよね・・・
悪意とかそういうのに耐えられるようになつたもんね・・・
なんでこんな以外な落とし穴があつたんだろう・・・
あ、そりか 僕つてひきこもり体质だからだね・・・

「・・・何してるの？」

「ひゃわつー？」

び、びっくつしたーちょっと黄面てるつむじに真雪ちゃん お風呂か

ら出てたよー

つてか真雪ちゃんとこれから暮らすことになったしな・・・

やつぱり俺の能力のこと教えたほうがいいよな・・・
始めの方は普通でも能力教えたら去つて行つた人多いし・・・
それは俺には辛すぎるんだ・・・
だったら仲良くなる前に俺の事を教えておくんだ・・・
変な人つて思われても構わない・・・
もし俺が好きになつた人に嫌われたりするよりは遙かにマシだと思
うんだ・・・
初めから嫌つてもらつた方が気が楽なんだよ・・・！

真雪ちゃんはどうなのかな・・・

中学のやつらと同じで近寄らないようになる？

友達の振りをして金田当りで近づいてくる？

それとも・・・それとも神父さんや由紀弥さんのように俺を
温かくしてくれる？

・・・大丈夫・・・だよね

うん、心の準備はできた

神父さん・・・俺の心は強くないよ・・・ただ壊れにくくなつただ
けなんだ・・・

「あれ・・・真雪ちゃん・・・冗談とか思つだらうナビ・・・

聞こえて出でこいとがめる・・・

「・・・・・・・?」

あ、ナニセナニで呼んでしまったな・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ（前書き）

やばい・・・バトル物書きたい・・・

二次創作書きたい・・・

主人公最強とはいがなくともある程度強い感じのが書きたい・・・

どうしよう・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ

まずは結果から話さう

俺の能力は受け入れてもらえた

まあ、どっちかというと よくわかつてない・・・という感じだつたけどね・・・

それと同時に彼女の話も聞いた

なんやら悪の組織のボスの娘とかで・・・
しかも人工的に作られたとかで・・・

厨二病としか思えないから 心を覗かせてもらつたけど・・・マジ
だつた・・・

正直 僕の過去がその辺に落ちてる石こいレベルのひびきだつた

暗殺に秀でている者を求めて それが見つからないものだから作ることにしたらしい

幼いころから 武術に暗器に気配の消し方に・・・修行の風景は思い出したくもない

そして人ではなく、兵器として扱われ

ただ人を殺すことにしか使われなかつた

俺はこれを見た瞬間に彼女を抱きしめて「君は人だ」と何度も叫んだ

本当なら彼女が泣いてるはずなのに俺が泣いていた

彼女はわけもわからず俺を抱きとめてくれた

反対だよな・・・俺が受け止めるはずなのに

と、まあこんなものを見てしまつた俺は彼女が心配で仕方がない
わけで・・・

つい彼女に「一緒に高校行く?」と聞いてしまつたわけだ

それを言った瞬間由紀弥さんが待つてましたと言わんばかりに
家にあがりこんできて

「話は聞かせてもらつたわ後のこと私は任せ「などと意味不明な言葉を言つて
書類を残して去つて行つた

書類には学園の入学手続きとか書いてあつて・・・

はあ・・・由緒^{ゆき}尙^{むか}わんせいつのまに用意してたんだろつか・・・

すひ^{すひ}じ不思議だ・・・

うーん・・・覚悟してたのになんか拍子抜けだ（後書き）

山乃江学園

私立の学園

中高大とエスカレーター式になつている

こここの大学から医者や政治家になつた人が多く、毎年志望者が多い
高校と大学の途中編入試験はとてつもなく難しい事で有名
中学の入試はそれほど難しくはない

全校生徒は例年900 1000人

クラスは一学年に12

一クラス40人くらい

毎年文化祭が大賑わいで有名

文化祭ではミスコンや格闘技大会などがある

寮から通う人と自宅から通う人がいる

寮とは名ばかりでマンションのような作り

寮は大学の隣に男子校が、中学の隣に女子寮がある

寮は中高大統一である

地図的には

女子寮 中学校 高等学校 大学校 男子寮

となつている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0499w/>

俺と彼女と夢物語

2011年10月9日15時04分発行